

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

本田晃子

【所属】(助成決定時)

北海道大学 スラブ研究センター

【研究題目】

メディアの中の建築：ソヴィエト建築の全体主義化においてマスメディアが果たした役割の研究

【研究の目的】(400字程度)

本研究は、スターリン期の建築・都市計画と、それに関するメディア上の言説・イメージとを相関的に読解していくことを試みるものである。それを通して、社会主義リアリズムと呼ばれる全体主義的な建築様式の形成プロセス、さらには建築家たちと彼らの作品が全体主義のメカニズムに組み込まれていった過程を明らかにすることが、本研究の目的である。

具体的には、1930年代末から40年代初頭にかけて撮影された下記テーマ①・テーマ②の映画中の、新首都モスクワのイメージを分析対象とした。そして1935年に採択された首都モスクワの再開発計画、通称ゲンプラン(全体計画)とそれによって変貌したモスクワが、映画という最も大衆的なメディアにおいてどのように描き出され、さらにこれら映画の中の建築イメージを通じて、ソ連邦内における象徴的中心としてのモスクワという首都神話がいかに形成されたのかを論じた。

【研究の内容・方法】(800字程度)

テーマ①：映画『輝ける道』(1940年)内における博覧会建築空間の分析

テーマ①では、初期ソヴィエト映画界を代表する映画監督アレクサンドロフの代表作『輝ける道』をとりあげた。そこで注目したのが、同映画のクライマックスにおける、モスクワの新しい中心、全連邦農業博覧会の場面である。まずは当時の建築雑誌などの出版物を通して、この博覧会会場が35年から39年にかけて、古典主義建築に民族的建築様式を接ぎ木した社会主義リアリズム建築へと建てかえられていった経緯を明らかにした。ついで映画内の博覧会会場と現実の会場における建築物の配置の相違を指摘し、アレクサンドロフが各建築物のショットをモンタージュすることによって、スターリン像を中心とする空間へと会場全体を「再建築」していたことを明らかにした。

なお同内容は2012年のロシア文学会全国大会、4th East Asian Conference on Slavic and Eurasian Studies(India, Kolkata)において報告を行った。

テーマ②：映画『新モスクワ』(1938年)に描かれたモスクワ再開発計画の分析

テーマ②では、メドヴェトキンの監督作品『新モスクワ』をとりあげた。同映画はスターリンのモスクワ再開発計画に捧げられた映画と言っても過言ではない。まずは物語の背景にどのようにこの再開発計画が取り入れられたのかを、再開発計画に関する出版物や公式記録に基づいて検証した。次に、主人公たちが暮らす再開発計画によって変貌しつつあるモスクワと、彼らが作中で制作する未来のモスクワの映像とを比較し、不断の運動状態にあるモスクワと、既に完成された不動の都市モスクワとの間のギャップを指摘した。このギャップは、不動性・モニュメンタリティを至上と

する社会主義リアリズムの規範とドヴェトキン自身のスタイルの衝突を示すものであり、それゆえに作中において現在のモスクワから未来のモスクワへの移行は描かれず、二つのイメージは分断されたままに終わるのである。

なおテーマ②については、2013年のロシア文学会全国大会において報告を行った。

【結論・考察】(400字程度)

20世紀の前半に生じたマスメディアの生活への急速な浸透は、人びとの建築との関わり方も変えることになったが、上述の映画内における首都モスクワの様々なイメージは、現実の都市空間や建築空間とは時に矛盾・対立し、それらを上書きさえしようとするものであった。しかし当時首都を直接訪れることが困難であった大多数の人びとは、これら実際の建築物と純然たる虚構の混合物としてのモスクワ・イメージを通してのみ、首都の姿を知り得たのである。このようなモスクワ像が形成された背景には、メディアを通じてソ連邦の中心としての権威をモスクワに付与し、中央集権体制を正当化しようとする、党指導部の意図があった。

以上のように、本研究では同時期の映画内に取り入れられたモスクワに関わる建築・都市イメージが、ソ連邦という空間の象徴的ヒエラルキーの形成に利用されたことを明らかにした。今後も引き続き、マスメディアの中の建築表象の分析を継続し、ソ連邦の全体主義化の過程において建築イメージが果たした機能を論じていく予定である。